

地域活性化という「遊び」

39

京都市 福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

家 族で取り組む農場カフェに
ポツポツ子供が

増えてきました。

畑のただただ広い敷地があつて

ヤギがいたり

鶏がいたりするだけなので

有名な遊園地のように

お金を払えばわーっと楽しませてく

れる派手なアトラクションはありま

せん。

そんなところへ一度来れば

十分なような気がしますが

二度、三度と来てくださるお客さん

が結構いるのです。

どうしてか？

お客さんがうちの子たちと仲良くな

つて

もう一度遊びたい

というのももちろんあるでしょう。

それ以外の大きな理由として

うちの農場で一日遊んでいると

遊んでいる子たちに不思議なことが



数年前に来た経験が忘れられない！と大阪からまた来てくれた子供たち。作文にも書いてくれたそうです。

起こるのです。

あれ？

○〇くん、トマト嫌いじゃなかった

つけ？

え???

虫怖くないの？

自然というアトラクションのなかで
子供たちに不思議なことが起こる

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいくなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

○〇ちゃん、転んだらすぐ泣いちゃうのには

今日は一度も泣かないね

というように

当の本人にとっても

???な現象です。

そ ういうことが一度始まると
次回カフェに訪れた時には

到着するなり

うちの子たちと同じように

靴なんか脱ぎ捨てて

楽しそうに裸足で広場を駆け回り

大声で叫びながら虫を追いかけ

木に登ったり

ちよっと土のついた

とれたての野菜や

食べられる雑草や木の実を

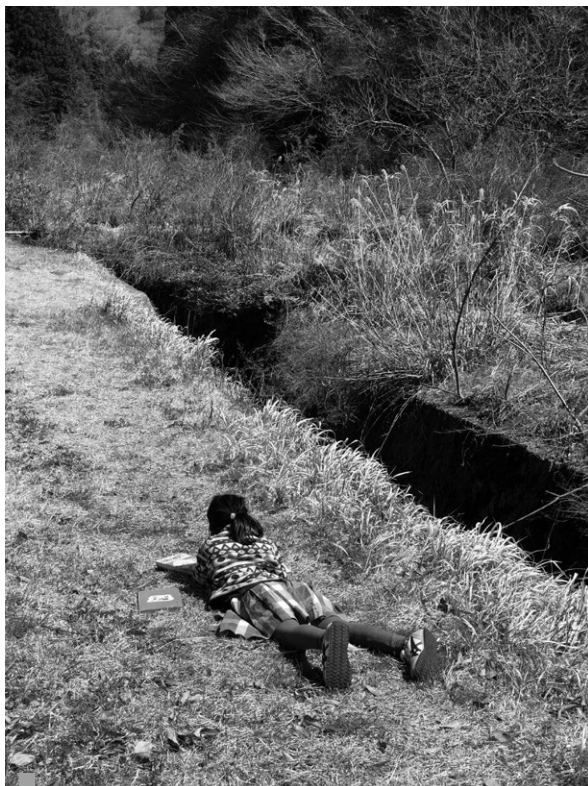
かじったりしています。

最初のうち

靴脱いじゃダメでしょ！

ちよっと静かにしなさい！

ちゃんと手を洗いなさい！



原っぱに寝転んで読書してもいいのだ！



シロツメクサで作った首飾り???が
夢中になるうち長さ5m越え。



この子はヤギに触るの初めてで、とても怖がっていましたが
すぐ慣れました。



裸足で遊んで
足の裏怪我したけど、
へっちゃらだよ！と
成長した男の子。

と怒っていたお母さん方も
あまりに楽しそうな子供の姿に
「まっいいか」と最後は笑顔で許し
ちゃうよう
回を重ねるうち

裸足に何も言わなくなり
雑草や木の実を一緒にかじったり
少々のケガでは驚かなくなり
僕ら家族の影響も少しはあるのでし
ようが
やはり自然というものが
人をそういう気持ちにさせるのでし
ようね。
そういう意味では
地方ほど恵まれていると言えるので
はないでしょうか？
何百何千億とお金をかけて
アトラクションを作らなくても
豊かな自然や何も無いというアトラ
クションはそこにあります。
史 上初の10連休となったゴール
デンウィーク。
どこのキャンプ場も
予約でいっぱいだったと聞き
ただのキャンプブームではなく
人が自然というものに飢えているの
だなどと思いました。
自然というものに対して
飢えというものを感じたことのない
限界集落という地で
家族で楽しく遊びながら
自然と農業と人を繋ぐお手伝いを
仕事とさせていただいていることに
日々感謝するとともに
それを我々家族に与えられた使命と
して今後も遊び続けていきたいと思
います。